

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 関 由真

関由真氏の博士論文「日韓両語における視覚動詞の多義性と意味連鎖 - [みる]・[보다 pota]と[てみる]・[어/고 보다 e/ko pota]の対照を中心に-」の審査結果について報告する。

本論文は日韓両語の視覚動詞[みる]と[보다 pota]およびその派生形式である[てみる]と[어/고 보다 e/ko pota]を取りあげ、両言語を対照しつつ、これらの意味の全体像を把握することを目的としたものである。従来の研究では、動詞[みる]の意味とその派生形である[てみる]の意味の関連性が十分考察されておらず、多義性と意味連鎖の観点から詳細な検討が必要である。また、類似した用法を持つ韓国語[보다 pota]と[어/고 보다 e/ko pota]を比較対照し、その共通点と相違点を明らかにすることにより、視覚動詞の多義性と意味連鎖に関し、普遍性と個別性という観点からの考察が可能となる。

本論文は6章からなり、まず第1章では、多義に関する先行研究と本論文の分析に必要な諸概念整理・提示している。

第2章では、日本語の視覚動詞[みる]の多義的な意味がどのような動機づけにより、如何なる多義構造を持つかについて考察している。その結果、[みる]のプロトタイプ的な意味は「視覚認知」であり、この基本的な意味から、人間の「理解・判断」「一般的な経験」などの意味への拡張を見せていることを明らかにし、「視覚」からその他の意味への拡張の動機付けを検討することにより、[みる]の多義構造を提示した。

第3章では、視覚動詞と意味的な連続性を持つと思われる[てみる]の意味の問題に取り組んでいる。本論文では、[てみる]が持つとされる「試行」「認識」という二つの意味の共通基盤は、本動詞[みる]の多義的な意味の一つである「判断」であるとし、この二つの意味は視覚動詞[みる]の意味と構文構造の関わり合いから生成されるものであることを主張している。用例の詳細な検討の結果、[V てみる]は[V1 テ V2]の構文構造により、〈手段-目的〉〈原因-結果〉の関係に再解釈され、「試行」「認識」の意味を持つことを示した。

第4章では、第2章で提示した[みる]の多義構造を根底に据え、韓国語の視覚動詞[보다 pota]の意味と日本語の[みる]の意味における類似性と相異点を考察している。その結果、日韓両語の視覚動詞は同様の多義拡張を見せることを確認し、[みる]に対応しない[보다 pota]の個別例も分析の結果、多義構造のいずれかの意味カテゴリーに編入できることがわかった。このような考察によって、従来明確ではなかった[보다 pota]の多義性の全体像を捉えると同時に、[みる]と[보다 pota]の対応関係を明確にしている。

第5章では、日本語の[てみる]に対応するとされる韓国語の形式[어/고 보다 e/ko pota]について考察を行っている。まず、[어/고 보다 e/ko pota]の意味について、両者の重なりとずれの原因を究明するため、特に連結語尾[어 e]と[고 ko]の違いに注目して考察を行った。文末における[어/고 보다 e/ko pota]の意味については、[어 보다 e pota]は「試行」の意味を表し、一方、[고 보다 ko pota]は先行する「行為の達成」を表し、さらに時制との関連で「行為達成

への意志」あるいは「行為達成」そのものを表すようになる。このような[어/고 보다 e/ko pota]の違いは [어/고] による連結の様相の違いに起因しており、連結語尾[어 e]は、文レベルにおいて前件と後件を一つの連続した事象として捉えるという特徴を持つ、一方、[고 ko]の場合は前件と後件を二つの別個の事態として捉えることを指摘した。

さらに、[어/고 보다 e/ko pota]の意味の違いが最も見えにくい複文環境に現れる場合についても、両者の違いが[어/고 e/ko]による連結の違いによって説明可能であることを示した。すなわち、[어 보다 e pota]が先行する行為の結果としての後件を要求するのに対して、[고 보다 ko pota]はこのような制限はなく、行為の結果としての後件であっても、行為との関連性が希薄でランダムな後件であっても、適格に用いられることを明らかにした。以上の考察から[어/고 보다 e/ko pota]の重なりやずれの原因は連結語尾 [어/고] の違いにあり、[보다 pota]で表わされる認識を先行する行為と関連性のあるものに限定するか、そうでないかが両者の意味区分の基準となるということを確認した。

第5章では最後に、[어/고 보다 e/ko pota]と[てみる]の対照の問題を考えている。考察の結果、文末で[어 보다 e pota]は「試行」の意味以外に「経験」の意味を持つが、これに[てみる]は対応しないこと、文末の[고 보다 ko pota]と[てみる]の対応は見られないこと、複文においては、[어/고 보다 e/ko pota]が前件と関連性を持つ後件に対する認識を表す場合、[てみる]は[어/고 보다 e/ko pota]両方ともに対応するが、[고 보다 ko pota]の持つランダムな後件への認識には対応しないことを明らかにし、[てみる]と[어/고 보다 e/ko pota]の対応関係を明確に示している。

第6章では、結論と今後の課題を述べている。

本論文は、日韓両語における視覚動詞と、それから派生した補助形式について、その意味の関係を緻密に分析することによって、両言語の類似点と相違点を明確にしている。特に、両言語の補助形式の意味が、いずれも視覚動詞の意味と構文構造の関わり合いから生成されることを指摘するとともに、両言語の違いが連結語尾による構文構造の違いに起因することを明らかにした点は、従来の研究にはない独自の成果である。また、韓国語の[보다 pota]の多義構造を提示したこと、[어/고 보다 e/ko pota]の意味を明確にしたことは、韓国語学における新たな成果である。このような点において、本論文は、言語学、日本語学、韓国語学の分野において高く評価される論文だと考える。なお、一部の論述において不十分な点が見られること、日本語と韓国語の違いの背景についての考察が不足していることなど、今後検討すべき課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。